

現在、在宅医療を進める動きがあり、国の予算の問題なら病床数を減らすのも仕方ないなと思っていた。2日目に大泊診療所を見学させていただけることになった。そこは住民の方々にとって、診察の場というより話をしに来る場といった身近な存在のようで、とても賑やかだった。そこで福田医師が「国は在宅医療をって言うけど、ここは高齢化に関しては他の地域の10年先を行ってるからね。介護する人も高齢になってきて。そうになると、施設に入るしかなくなるんだよ。そう簡単にはいかないよね。」と話して下さった。市内には気づかない僻地の現状と、そこで働く医師の悩みを垣間見ることができた。実際、廃校となった宮田小で行われた健康診断に同行させていただいた際、患者さんや看護師など、ほとんどが高齢者であるという光景を目の当たりにした。医学科生が見学に来るのは初めてのようで、多くの方が「頑張ってるね。」と声をかけて下さった。

3、4日目には肝属郡医師会立病院内を見学させていただいた。内視鏡検査見学では、内視鏡挿入による吐き気を抑えるため、眠くなる薬を多めに打ってほしいと話す患者さんと医師との会話を聞くことが出来た。患者さんの、苦痛を和らげたいという気持ちが痛いほど伝わり、薬では喉の反射を抑えられない、薬の量を増やすのは呼吸が浅くなり危険だという医師の言葉が聞いていて辛かった。患者さんも納得できていないようだった。患者さんに事実を伝え、なおかつ納得し受け入れてもらえるような説明をするのは難しいのだと、改めて感じた。ものわずれ外来の見学では、認知症テストの様子を見学させていただいた。臨床心理士と患者さんとのやりとりの中で、質問に対する患者さんの答えが間違っても指摘せず、患者さんの答えを繰り返す心理士の様子が印象に残った。認知症に限らず「病気」という現実を突きつけられるのはショックだ。診察時だけでなく、患者さんに寄り添うことは常に重要なのだと知った。緩和ケア委員会とリハカンファレンスの様子も見学させていただいた。医師、看護師、PT、OT、社会福祉士が集まり、患者さんの情報を交換していた。疑問点はその場で解消し、お互い足りない知識を補っていく。医師だけでなく多分野の人で協力することが、患者さん一人一人の生活を多方面から支えるために必要なのだと感じた。

5日目には訪問診療に同行させていただいた。その患者さんは現在胃ろうと呼吸器をつけていて、「家に帰りたい」という強い願いから訪問診療を実現するに至ったそうだ。患者さんの自宅での様子は、私の想像以上にとてもお元気で、吸引器の手入れもスムーズに行い、自力で歩くことも出来ていた。患者さんの望むように自宅で過ごせていることが、その方の生きる希望となっているように思えた。在宅医療は難しい、確かにそうだが、予算の問題だけでなく、患者さんが望めば在宅医療が可能な環境が整うと良いなと思った。

「大滝の思いも深し医師の道」2日目に神川大滝公園を訪れた。滝の迫力に圧倒され、その滝壺の深さを想像した。今回肝属の病院を見学し、そこで働く先生方が地域医療の発展のため大変な努力をなさっていることを知った。自ら多くの病院を飛び回り、患者さんの立場に立って常に考える姿を見て、患者さんを思う気持ちの深さを神川大滝に重ね合わせた。

初日は介護老人保健施設「みなみかぜ」の見学と病院案内をしていただいた。利用者が心地よく過ごせるだけでなく、リハビリや入浴・食事などのサービスを提供し、在宅への復帰を支援するとともに、身体能力や認知機能などの能力に合わせたスペース分けやサポート体勢、施錠式の入り口にみられるような安全性など、いたるところに細やかな配慮がなされていた。病院案内においては、病院内の各課、医局、ナースステーションの紹介やあいさつ回りを通して病院内に多くの部署があることを知り、診療所などでは提供の難しい医療を供給する地域の拠点病院としての重要性や必要性を感じ取ることができた。

2日目の午前中は朝7時から廃校になった小学校で行われた特定健診の見学と佐多診療所・大泊診療所の見学を行った。健診においては、仕事に行く方のために朝早くから準備を整え、また診療所においても患者一人一人とじっくりと話をするなど、地域に密着した医療を提供していた。検診や診療所の利用者・医療関係者は年配の方も多く、肝属郡の高齢化率上昇による医療の問題点などを実感することができた。また、利用者や医療者が盛んに交流しており、医療提供の場としてだけでなく社交の場としても活用されていると感じた。

午後からは佐多の新鮮な魚を使った海鮮丼や、佐多周辺の地域実習において迫力ある佐多岬や雄川の滝を見学できたことで、肝属郡の魅力を垣間見ることができた。

3日目の午前中はエコーや心電図・内視鏡を行う実際の様子を見学した。患者への声掛けや眠らせるための薬の使用量を患者一人一人の体調などに応じて変えるなど、常に目配り・気配り・心配りを行い、医療を提供する際の患者への配慮の重要性がよく分かった。

午後からはもの忘れ外来において認知症テストや診断の様子を見学した。肝属郡医師会立病院では認知症に対する支援を積極的に行っており、テストの内容の充実性や診断の細やかさなどを知ることができた。

4日目の午前中は透析見学・内科外来実習を行った。透析の内容や内科外来患者の診察の様子を知ることができ、貴重な体験ができた。

午後からは糖尿病外来、緩和ケア委員会、リハカンファレンスの見学をさせていただいた。糖尿病外来では患者さんに資料を使いながら丁寧に説明をしており、患者さんに対して誠実に接することの大切さを実感することができた。また緩和ケア委員会・リハカンファレンスでは患者一人一人の情報を共有することで、その後の対応などを決定していた。

5日目はALSの患者さんのもとへの訪問診療見学を行った。言葉を発することができない患者さんと筆記やジェスチャーによって意思疎通を図り、困りごとに対して真剣に考え、対応する姿に患者さんに対して真摯な姿勢を持つことの大切さを改めて学んだ。

俳句：医師不足 病院のない 地域まで 患者の元へと 車でかける

背景：健診や訪問診療を行う際、医師が自ら車に乗って健診場所や患者さんの元へと赴いており、患者さんや地域の人々のために奔走し、力を尽くす姿に感動した。